

志向性と意味

——富山豊『フッサール：志向性の哲学』を読む——

秋葉 剛史
(千葉大学)

本稿は、富山豊氏による著書『フッサール：志向性の哲学』（青土社、2023年）に関する若干の考察である¹。以下、同書を「富山本」という略称で指示し、そのページ番号はゴシック体のアラビア数字で表すことにする。本稿は、富山本の内容に関していくつかの疑問を提起しようとするものだが、そのさいの問題関心の方向は富山本のそれとやや異なる部分があるので、その点について最初に断っておくことにしたい。

富山本の目的は、ひとことで言えば、フッサールの志向性理論の解釈（と解説）である。すなわち序章で明言されているように、富山本は「フッサールという哲学者が〔…〕展開した「志向性」という概念をめぐる議論を特別な予備知識なしで理解できるよう噛み砕いて論じようとする」（21）ものであり、その狙いは「そもそもフッサールが「志向性」というものをどのように考え、その「意味」と「対象」というものをどのような枠組みで、どのような議論の筋道で分析していったのかということを明らかにする」（22）ことである。

1. 本稿は、2025年1月26日に東京大学本郷キャンパスで開催された、フッサール研究会特別企画「富山豊著『フッサール 志向性の哲学』合評会」で行った提題発表に基づいている。同企画のオーガナイザーである橋詰史晶氏、当日の会場で有益なコメントを寄せてくれた参加者のみなさま、事前の打ち合わせにてまだ生煮えの筆者のアイデアに対して啓発的なコメントをくれた千葉清史氏と富山豊氏に感謝する。

このような解釈研究としての富山本の意義は非常に大きなものと思われるが²、本稿では解釈的というよりもむしろ理論的な観点から、同書の内容を検討してみたい。つまり本稿の目的は、富山本がフッサールの見解の再構成として提示する志向性理論を一つの哲学理論として——志向性という現象に関する一群の理論的問題への解答として——吟味した場合に出てくるであろういくつかの疑問について論じることである。

本稿のこうした考察は、上述した富山本の目的からすると「外在的」なものではあるが³、それでも一定の意義はもちうると思う。なぜなら以下でみるように、富山本で提示される志向性理論は理論としてもかなりよくできており、フッサール解釈の文脈を離れても（つまり理論的関心のもとでも）十分考察に値するように思われるからである。また加えて、ある哲学者に帰属可能と思われる主張や理論をいったん解釈上の関心から離れて（独立の理論として）検討することでそこに潜在する問題や緊張が明らかになり、それが翻って問題の哲学者の解釈研究を進展させるきっかけになる、という可能性もあるだろう。

以下では、まず第1節で、富山本で提示される志向性理論を特徴づける。そのうえで第2節と第3節では、その理論に含まれる二つの主張に関してそれぞれ疑問を提起する。

1. 富山＝フッサール理論

本節では、富山本で提示されるフッサールの志向性理論の内容を確認する。そのためにも、問題の理論がそもそもどのような問いへの解答として位置づけられているかを確認し、次に、その理論を三つの主張からなる理論として定式化する。

問いの確認から始めよう。ひとこと言うと、富山本の出発点となるのは、「いったい何が志向性を成立させるのか」(40)という問いである。しばしば言われるように、私たちの心的経験は「志向性」と呼ばれる特徴、すなわち、何かについてのもの

2. 解釈研究としての富山本の特色として、著作全体を通じた議論の稀にみる具体性と、(ダメットの解釈する)フレーゲ意味論の枠組みを援用することで得られる解釈の明晰性、の二つは特に顕著だと思われる。

3. ここで「外在的」という語は「内在的」との対比で用いており、「内在的」な議論としては、ある著作が自身で立てる目的を共有してその枠内で著作の成功を評価するような議論のことを考えている。

である、あるいは何かに向けられているという特徴をもつ。たとえば、信念はつねに何かについての信念であり、欲求はつねに何かについての欲求である。しかし、私たちの心的経験がもつこうした特徴はいったい何に由来するのか。各々の経験をその対象に結びつけるもの、その経験にある対象への方向づけを与えるものはいったい何なのか。フッサールの理論の背景として富山本が設定するのは、志向性の一般的本性に関するこのような問いである。

ただしこの問いに答えようとする場合、考慮に入れるべき多くの制約がある。というのも、富山本の第 1 章で丁寧論じられているように（その丁寧さは同書の特徴の一つである）、志向性が成り立つと言えるケースには実にさまざまなものがあり、志向性の一般的本性に関する理論はそれらをまさに志向性のケースとして説明できなくてはならないからだ。いわば志向性理論にとってのデータとも言えるそうしたケースには、次のようなものがある⁴：

- (A) ある経験が実在する特定の対象 *o* に向けられているケース。ただしそうしたケースの中には、i) その経験の主体が対象 *o* に対し物理的視線や注意を向けている場合とそうでない場合、ii) 経験主体と対象 *o* が遠近さまざまな時空的関係にある場合、iii) 対象 *o* が具体的である場合とそうでない場合、iv) 経験主体が対象 *o* のイメージを有している場合とそうでない場合、v) 経験主体が対象 *o* の存在を確信している場合とそうでない場合、といった多様なバリエーションが含まれる⁵。
- (B) ある経験が実在する何かに向けられているが、特定の対象に向けられているわけではないケース (37ff)。(e.g., 薄暗がり「何かが見えた」というケース、「とにかく何か飲み物が欲しい」というケース)
- (C) ある経験が何らかの実在しない対象に向けられているケース (52ff)。(e.g., ヴァルカン、フロギストン、ホームズ、最大の自然数などについて考えるケース)

予想されるように、これらのケースすべてに通用するような志向性の説明を与えることは決して容易ではない。たとえば、ある対象への志向性を、その対象の心的イメ

4. 志向性理論の制約としてはこれら以外にも、表象内容の問題 (42, 50) や同一性テーゼ (65f) も重要だ。

5. 各ケースについての富山本内での参照箇所を示すと、i) は 42、ii) は 43f、iii) は 44、iv) は 46、v) は 55、でそれぞれ論じられている。

一ジをもつこととして説明しようとする見方は、上記の (A-iii) や (A-iv) をうまく説明できないだろう (45ff)。また同様に、志向性の成立を対象からの因果的はたらきかけに訴えて説明しようとする見方は、上記の (A-ii) (A-iii) (C) とうまく折り合わないだろう (49ff)。

ではあらためて、上のような種々のケースをうまく捉えるにはどうしたらよいか。富山本の第 2 章以降は、この問いへの答えになりうる見方としてフッサールの志向性理論を再構成している。途中経過を省いて言えば、富山本が提示するフッサールの理論の要点は、たとえば第 3 章後半における次の一節でまとめられている：

[...] 我々の作用は必ず「対象」を持つ。すなわち対象への方向性を持つ。しかし、このことは必ずしも「対象が存在する」ということを意味するわけではない。志向性が成立するとき、必ず存在するのは対象ではなく意味である。我々が意味を把握することで、その意味が定める対象への方向性、つまり志向性が成立し、我々はその対象について考えることができるようになる。しかし、そこで定められるのは対象の探し方、探している対象であると言えるための条件であって、条件を満たす対象がじっさいに存在するかどうかは定まらない。対象は存在せず、意味だけが残るかもしれない。(169)

この箇所、および他の箇所（たとえば 164ff, 177, 227, 253）での議論から、われわれは次の三つの主張からなる志向性理論をとりだすことができる。以下これを、「富山＝フッサール理論」と呼ぼう：

- (1) 心的経験 a は志向性をもつ \Leftrightarrow ある S が存在し、 S は経験 a の意味である
- (2) S は経験 a の意味である $\Leftrightarrow S$ はある手続きであり、その手続きは、経験 a （または a を部分として含むより包括的な経験）の真偽を検証するための手続きの中で a に割り当てるべき値を探索する仕方を定めるものである⁶
- (3) 経験 a は対象 o に向けられている \Leftrightarrow 経験 a の意味であるところの探索手続きを実行したときに与えられる対象は o である

6. ここで a に「割り当てるべき値」と呼んだものは、富山本では a の「意味論的値」として説明されている（第 2 章）。その値は、 a が名辞的作用なら通常の意味での対象 (94)、 a が述語的作用ならその述語の外延または関数 (94)、 a が命題的作用なら真理値または事態 (101f, 114ff)、などになると考えられる。

それぞれの主張の内容と役割をかんたんに確認しておこう。まず (1) が述べているのは、経験の志向性にとって本質的なのはそれが「意味」をもつことである（その「対象」は必ずしも存在しなくてよい）ということだ。しかしでは、経験がもつ「意味」とは何なのか。それに答えるのが次の主張 (2) である。この主張によると、ある経験の意味とは、その経験（もしくはそれを含むより包括的な経験）の真偽を検証するために必要となる手続きのことである。そして最後の主張 (3) は、以上の二つの主張に基づき、志向的对象の概念に説明を与えている。すなわち、ある経験の志向的对象とは、その経験の意味であるところの探索手続きをもし実行したならば与えられるであろう対象のことである。

以上の三つの主張からなる富山＝フッサール理論は、なかなかうまくできているようにみえる。たとえば、イメージをもつことの困難な対象（e.g., 千一角形）や、実在しない対象（e.g., ヴァルカン）に向けられた経験のケースを考えてみよう。これらのケースは、先述した志向性のイメージ説や因果説では説明困難なものだった。しかし富山＝フッサール理論のもとでは、これらの対象に関する信念や主張の真偽を確かめる手続きが定まる限りにおいて、それらについての志向的経験が成立すると問題なく言うことができる。このようにして同理論は、上で挙げた諸々の志向性のケースをうまく説明できるようにみえる。

2. 道徳的判断の意味をどう考えるか

富山本で提示される理論の内容が確認できたところで、ここからはそれに関する疑問を論じていこう。本節ではまず、上記の主張 (2) に関連するいくつかの疑問を提起する。

富山本の中ではっきり述べられているわけではないが、前節でみた富山＝フッサール理論は大まかには「検証主義」的な発想に基づく理論とみなすことができる。なぜならその主張 (2) は、経験の「意味」という概念を「真偽検証の手続き」という概念に基づき説明しているからである。だが検証主義的な意味理論に対しては、伝統的に、その射程に関わる批判が向けられてきた。つまり、検証主義が提案する意味の概念は狭すぎて（もしくは厳格すぎて）ある種のケースで不都合な帰結を招くのではないか、という趣旨の批判である（cf. Uebel 2019）。このタイプの批判はさまざまな

かたちで、さまざまな例に即して行われてきたが⁷、以下では特に道徳的¹判断という例に即してそれを展開してみよう。

周知のように、道徳的¹判断の本性をどう捉えるべきかという問題はメタ倫理学の中心問題の一つとして長らく論じられてきた (Miller 2013, Van Roojen 2015)。ここで道徳的¹判断というのは、典型的には何らかの道徳文の (誠実な) 発話によって表現される²ところの心的な状態ないし態度のことであり⁸、これはある種の志向的³経験として捉えられる。大きな括りとしては、こうした道徳的¹判断の本性に関するメタ倫理学上の見解は、「認知主義」と「非認知主義」という二つの立場に分類されてきた。しかし以下で論じるように、富山=フッサール理論は、道徳的¹判断に関するこのどちらの立場のもとでも一定の課題ないし困難に直面するようにみえる。

まずは非認知主義の路線で考えてみよう。非認知主義によると、道徳的¹判断はそもそも真偽を有意味に問えるような認知的⁴状態 (信念や推測に類したもの) ではないか、あるいは少なくともそうした認知的⁴状態以上の何かを含んでいる。たとえば、「肉食は悪い」という発話によって表される心的⁵状態は、肉食に対する否認⁶の感情であるとされたり (エイヤーの情動主義)、肉食を許容不可とするような規範システムへのコミットメントであるとされたりする (ギバードの規範表出主義)。

このような非認知主義の見方が、富山=フッサール理論に一定の問題を提起することは明らかだろう。先にみたように、この理論の主張 (2) は一般に経験の意味というものをもっぱら真偽⁷検証の手続きという観点から特徴づけている。よって (2) にしたがえば、道徳的¹判断がもつ意味もそうした観点から捉えられるはずである。しかし非認知主義によると、道徳的¹判断はまさに真偽⁷の検証という観点からは捉えることのできない意味をもつ。つまり非認知主義によれば、ある道徳的¹判断 a の意味を捉えようとするとき、「a の真偽⁷はどんな手続きによって確かめられるのか」と問う

7. たとえばこの種の批判の中で比較的よく知られているのは、検証主義は「すべての物の大きさが二倍になった」や「世界は過去の存在のすべての証拠とともに五分前に創造された」といった (一見有意義な) 主張の有意義性を確保できないのではないかというものや、検証主義の主張それ自体が (検証可能性を欠くため) 無意味になってしまうのではないかというものだろう (ライカン 2005: ch.8)。

関連して、富山本の 224ff では数学の例として、「最大の双子素数」という表現——その対象の探し方自体が知られていない表現——の有意義性をいかに確保できるかという問題が論じられている。

8. 「典型的には」とつけたのは、ここでいう道徳的¹判断は必ずしも外的⁹発話として表明される必要はなく、何らかの事情で主体が表明を差し控える内的¹⁰確信のようなものであってもよいから。

ことは端的に的外れである。そのためにはむしろ、「a はどんな情動的状態や動能的態度を排除し、どんな状態や態度と両立するのか」等のことを問わねばならない (Schroeder 2010: chs.4-7)。

こうした非認知主義の見解は、経験の意味というものに対する一つの可能なアプローチであるように思われるが、富山＝フッサール理論はそれにどういう態度をとるのだろうか。たとえば、非認知主義者の考える意味は、(2) によって特徴づけられる意味とは別種の意味だと認めるのだろうか⁹。あるいは、前者の意味も結局のところ後者の意味に還元されると考えるのだろうか。この点に関する富山氏の意見を聞いてみたい。【疑問 1】

では次に、もう一方の認知主義のもとで事態がどうなるかを考えてみよう。一見すると、この立場は特に大きな問題なく富山＝フッサール理論の (2) と折り合うようにみえる。なぜなら認知主義によれば、道徳的判断は真ないし偽でありうる認知的状態の一種であり、それゆえ道徳的判断がもつ意味も、真偽の検証という概念に基づき特徴づけ可能だと考えることができるように思われるからだ。

しかしこの場合も疑問の余地は残る。ここで問題となるのは、たとえ道徳的判断の意味が真偽の検証という概念により特徴づけ可能なものだったとしても、その真偽を検証するために実際にどんな手続きをふめばよいかは必ずしも明らかでないという点だ¹⁰。たとえばある人は、会話相手が「肉食は悪い」と主張するのを聞いて心から同意しつつも、その主張が真であることをどう検証したらよいかはさっぱりわからないかもしれない。この場合、先の主張 (2) にしたがえば、その人は自分が同意しているはずの主張の意味をまったく理解していないということになってしまうだろう。あるいは別のケースとして、「肉食は悪い」という主張の真偽は A という手続きで検証できると信じる人と、そのことは B という手続きで検証できると信じる人がいるとしよう。この場合 (2) にしたがえば、その二人は「肉食は悪い」という主張によって単に別々のことを理解しているだけだ——よってたとえば両者は肉食が悪いかどうかについて意見の対立さえできない——ということになってしまうと思

9. ここで、非認知主義者の採用する意味概念を、単なる意味概念の「濫用」として単純に切って捨てることは難しいように思われる。というのも、一部の非認知主義者（表出主義者）たちは自分たちの意味概念に基づき、まさに道徳語や道徳言明の意味論と呼ぶもの——問題となる言語単位に一定の値を割り当てたうえで、言明の適切性条件や、言明間の推論的關係などを体系的に説明する理論——を提示しているからである (cf. Schroeder 2010)。

10. 実際、私たちはどのようにして道徳的認識に到達できるのか、という関連する問題はメタ倫理学でも一つの争点となってきた (Van Roojen 2015: ch.3)。

われる。以上のように、(2) からは一見もっともらしくない帰結が導かれるようにみえるが、この点について富山氏はどう考えるのだろうか¹¹。【疑問 2】

3. 志向的關係は結局のところ何に由来するのか

では続いて、富山＝フッサール理論の主張 (3) に関連する疑問を論じていこう。ひとこと言えば、ここで提起したい疑問は、私たちの経験が特定の対象に対してもつ志向的關係の由来に関するものだ¹²。

第 1 節で確認したように、富山＝フッサール理論は、ある作用がある対象に向けられている（それについてのものである）という關係性を次のように説明していた：

- (3) 経験 a は対象 o に向けられている ⇔ 経験 a の意味であるところの探索手続きを実行したときに与えられる対象は o である

この主張は具体的にどういうことを述べているのだろうか。ここでは特に経験的思考のケースに関して、富山本で挙げられていると同様の例 (177) をもとに説明してみよう。例として、私が富山本のあるページを読みながら、「この本の表紙はたしか白かったな」とふと思ったとしよう。この場合、私の思考作用は明らかに「この本の表紙」に向けられている。つまり私の思考作用は「この本の表紙」についてのものである。しかし、そう言えるのはなぜか。それは、「この本の表紙は白い」という思考が真かどうかを確かめようとする場合、私はある一定の手続き——自分がいま手に持っている本を閉じるか裏返すか、必要があれば光の十分当たる場所に移動し

11. 多くの読者はお気づきのように、いま道徳的判断に即して提起した二つの疑問は、より一般的な疑問の特殊例として位置づけることもできる。すなわちまず、非認知主義のところでは提起した疑問は、真偽の検証という概念によって説明可能な意味とは別種の意味についての語りをどう扱うべきか、という疑問の一例として位置づけられる。また、認知主義のところでは提起した疑問は、真偽の検証の仕方について十分な合意がないような判断や信念の意味をどう考えるべきか、という疑問の例として捉えることができる。

12. この節で論じる疑問は、本稿のもとになった提題発表（註 1 参照）のときには「メタ意味論」という分野と関連づけて提示したのだが、メタ意味論への言及は必ずしも本質的でなかったので本稿では割愛する。ただし葛谷 (2025) が論じるように、意味に関するフッサールの議論をメタ意味論と関連づけて解釈するという方針は実り豊かなものと思われる。メタ意味論という分野の概要については Burgess & Sherman (2014) を参照のこと。

たうえで、本のこちら側を向いている面に視線をやる、といった手続き——を実行する必要があり、かつその手続きによって実際に与えられることになる対象がまさに「この本の表紙」だからである¹³。言い換えると、私の思考作用は、他でもなくこの本の表紙を直接調べることで真偽の決着がつくようなものであるがゆえに、この本の表紙についてのものだと言えるわけである。

この例からもわかるように、(3) の右辺で述べられる「探索手続き」とは、要するにある適切なタイプの直観を生み出すためのプロセスのことである (179)。ここで「直観」というのは、何らかの対象を直接的・本源的に（現物そのものを）与える作用のことであり、上述のような経験的思考の場合、そうした直観に当たるのは知覚作用ということになる¹⁴。これをふまえると、上の主張 (3) は次のように定式化し直すことができるだろう：

(3*) 経験 a は対象 o に向けられている ⇔ 経験 a の意味であるところの探索手続きを実行した場合に生じる直観が与える対象は o である

だがここで注意したいのは、富山本のそもそもの問題設定からすれば、話をここで終わりにすることはできないはずだという点である。なぜなら、(3*) でもち出される「直観」も志向的経験の一種であり、一般に志向的経験の志向性は何によって成立するのかという問いこそ、富山本が（フッサールの理論の背景として）掲げていた問いだったからである。とりわけ、先述した経験的思考のケースについて言えば、ここでの問題は次のように述べられる。たしかに上の (3*) は、この本の表紙を見ないままそれについて考えるというような志向的経験——フッサールのいう「空虚志向」(177) ——が特定の対象に結びつくのはなぜか、という問いには答えているだろう。しかし (3*) がいまだ答えていないように思われるのは、そうした（空虚な）経験に特定の対象との結びつきを与える知覚作用自体がもつ志向的關係——それが直接的に「与える」とされる対象との関係——は何によって成り立つのか、という問いである。筆者のみる限り、富山本は少なくとも主題的には、知覚をはじめとする直観がもつ志向的關係の由来については考察を掘り下げていないようにみえるが、もし尋ねられたら富山氏は上の問いにどう答えるのだろうか。【疑問 3】

13. 一般に、ある経験が向けられている対象とは、その経験の意味にしたがって「しかじかの手続きを実行するならばそのときには目の当たりになることができるようなもの」(178) と説明されている。

14. 数学的对象の場合の直観については、180-2 での説明を参照のこと。

ここで少々勝手ながら推測させてもらえば、この問いに対して富山氏が与える可能性のある一つの答えは、ある種の「全体論的」ないし「推論主義的」な見方に基づくものである。たとえば富山本の終章における次の一節は、そうした答えのヒントを与えている。

[...] いかなる種類の存在者であれ、それについて語り、それについての志向性が成り立つためには、たとえいま目の前にその姿は見えていなかったとしても、その対象についての様々な主張を確証したり反証したりする可能な様々な経験とのあいだに正当化の実践という繋がりがなければ、つまりそうした語りがいかなる経験によって正当化されうるものなのかということすら皆目見当がつかないというのならば、それはそもそも「何かについて語っている」と言うことすらできないだろう。(253、強調は引用者)

ここでの富山氏の直接の意図は（引用の1~2行目が示すように）、非直観的な語り——空虚な志向——がもつ対象への方向性を、対応する直観との正当化的なつながりに訴えて説明することだが、ここでもち出される正当化的なつながりは、必ずしもその方向でのみ理解される必要はないと思われる。つまり問題のつながりは、（空虚な志向でなく）まさに直観がもつ対象への方向性をも説明するものとして理解できるように思われる。そう理解した場合、私たちは上の引用文と対称的な仕方で、次のように述べることができるだろう。

いかなる種類の存在者であれ、それについての直観が成り立つためには、その直観によって確証されたり反証されたりする可能な様々な（空虚）志向とのあいだに正当化の実践という繋がりがなければならない。もし仮に、ある直観がどんな志向を正当化しうるものなのかということすら皆目見当がつかないというのならば、私たちはそもそも「何かを直観している」と言うことすらできないだろう。

つまり、どんな直観と言えどそれ単独で特定の対象への方向性を供給できるわけではなく、そうした方向性は、その直観が他の諸々の志向と結びつて正当化のつながりによってはじめて成立する、ということだ。より一般的に言えば、ここでの描像は、さまざまな経験が正当化的（もしくは推論的）関係に立つことで形づくる全体的な連関がまずあって、あらゆる経験（直観であれ空虚志向であれ）は、そうした連関の中

でそれが占める位置や役割に応じて特定の対象への方向性を獲得する、というものだ。筆者の考えでは、富山氏は上で提示した問い（知覚をはじめとする直観がもつ志向的關係は何に由来するのか）に対して、このような「連関ファースト」の答えを支持しそうに思われるのだが¹⁵、はたしてこの推測は正しいだろうか。【疑問 4】

ただし、仮にこの推測が正しいとすると、富山＝フッサール理論には一定の修正ないし拡張が必要になるかもしれない。というのも、もし経験がもつ対象への方向性がいま直前で述べたような仕方定まるならば、ある経験の意味の決定にさいして、その真偽を検証するような経験（確証や反証）がもつ役割はそこまで特権的なものではなく——富山＝フッサール理論はそうした経験に特権的役割を与えていたが——ように思われるからだ。この考えにしたがえば、たとえば、「この本の表紙は白い」という空虚な思考作用の意味は、部分的には《しかじかのタイプの直観によって正当化されうる》ことによって決まるとしても、それと同時に、《もし正当化されれば「この本の表紙は黄色くない」という思考を正当化する》という特徴や、《もし正当化されれば「この本の表紙は透明である」という思考を排除する》という特徴などによっても部分的に決定される、ということになるだろう。もし富山氏が前段落で推測したとおりの答えを支持するとしたら、氏は富山＝フッサール理論のこのような修正——経験の意味の決定にさいしての確証や反証の非特権化——を受け入れる用意があるのか、その点もあわせて聞いてみたい。【疑問 5】

参考文献

- ・葛谷 潤 (2025) 『志向性の基礎：『論理学研究』におけるフッサールのメタ意味論』、晃洋書房。
- ・クラーク, A. (2025) 『経験する機械：心はいかにして現実を予測し構成するか』、高橋洋訳、筑摩書房。

15. もっとも、直観の中でも特に知覚作用は、直観的な部分志向に加え空虚な部分志向を含むと考えられるから、それがもつ対象への方向性を、あくまで「どんな経験がそれを確証するのか」という観点から説明することはある程度可能かもしれない（具体的にどうやるのかはあまり定かでないが）。

16. なお今のところごく粗い見通しでしかないが、こうした概念的・トップダウン的要素との密接な関連のうちで直観（経験）の内容を特徴づけるという方針は、近年の予測処理理論（能動的推論）における経験の捉え方と一定の親近性をもつように思われる（cf. クラーク 2025）。

- ・ 富山 豊 (2023) 『フッサール：志向性の哲学』、青土社.
- ・ ライカン, W. G. (2005) 『言語哲学：入門から中級まで』、荒磯敏文ほか訳、勁草書房.
- ・ Burgess, A., Sherman, B. ed. (2014) *Metasemantics: New Essays on the Foundations of Meaning*. Oxford University Press.
- ・ Miller, A. (2013) *Contemporary Metaethics: An Introduction, 2nd Edition*. Polity.
- ・ Schroeder, M. (2010) *Noncognitivism in Ethics*. Routledge.
- ・ Uebel, T. (2019) Verificationism and (Some of) its Discontents. *Journal for the History of Analytical Philosophy* 7(4): 1-31.
- ・ Van Roojen, M. (2015) *Metaethics: A Contemporary Introduction*. Routledge.